

会社は安全崩壊の責任とれ

「特急の走行中にドア開く」「モニター支柱ごと傾きあわや衝突」



3/28 走行中の特急「かいじ」のドアが開いた（写真は同系統のE353系）

JR東の安全崩壊が止まりません。今年に入ってからだけでも大規模停電や運休を繰り返してきました。さらに3月28日は中央本線で特急「かいじ28号」の走行中、ドアが開く重大事態が発生しました。続いて4月2日には宇都宮線・白岡駅のホームのモニターが支柱ごと傾き、列車と衝突しかねない状態でした。これも大惨事になっておかしくない重大事態です。

鉄道の安全が根本的に崩壊

特急走行中にドアが開いた原因は、使われていた特殊ネジが外れたことでカバー内の空気が漏れ出し、ドアを閉める力が弱まったことと報じられています。また、モニターについて

は支柱の劣化が原因とされています。適切な検査と修繕が行われていれば、どちらも起きなかつたはずですが、重大事故が止まらない根

本的な原因は、会社が進めてきたコストと要員の削減、徹底した業務外注化です。そして、外注化の破たんについては、喜勢社長自身が「このスキームは破たんしている」と認めています。

しかし、会社はこの責任を取るところか、4月1日から機能保全業務の外注化を強行しました。これほどの安全崩壊を目の当たりにして、「スキームが破たん」と語っていないがらです。どこまで鉄道業務をないがしろにすれば気が済むのでしょうか。

外注化・乗務手当廃止の撤回を

同じく4月1日、人事・賃金制度が改悪され、乗務手当廃止が強行されました。

乗務員は鉄道業務のもっとも中心的な職種です。その乗務員への仕打ちは、会社が鉄道業務をどこまで軽視しているかがよく表れています。だからこそ、機能保全外注化も強行できるのです。

鉄道の安全と仲間の権利を守るために、こんな会社に好き勝手に許してはなりません。外注化も、乗務手当廃止も、鉄道業務と現場の誇りを踏みにじる施策も、すべて今すぐ撤回すべきです。そのために職場に必要なのは団結した声と闘い、闘う労働組合です。